大阪・北芝地区フィールドワーク（2015 年 9 月 26 日（土）～27 日（日））

千里中央駅で集合したフィールドワークの参加メンバーは、「暮らしづくりネットワーク北芝」が用意した車に乗って、北芝地区に向かった。最初到着した場所は、ライトピア 21（隣保館）で、ここから北芝地区でのフィールドワークがスタートした。この北芝フィールドワークプログラムについて、以下では、５ステップに分けて紹介してみる。

Step1:まずは、地域の歴史・文脈を理解することから

丸岡康一氏から「であい・つながり・げんきになろう‘北芝’ー豊かな地域コミュニティを目指して」（部落解放同盟大阪府連合会北芝支部・部落解放運動改革の変遷）というテーマで、北芝の部落解放運動から流れてくるまちづくりの展開の歴史を篤くかたってもらった。丸岡氏の話のなかで、強調された内容を次のように整理してみる。①部落差別をなくすための運動体としての展開と同和対策の活用。部落差別が地域にどのような負の連鎖をつくっていたのか（例えば、不就学→不就労→無年金）。そのような差別をなくすための部落解放同盟の運動があり、それが国の同和対策事業につながった。同和対策事業を通した環境改善に取り組むために、北芝では遅れて部落解放同盟の支部ができた。②新たな運動としてまちづくりへの展開（同和対策事業を軸とした運動の破綻）。同和対策でハード整備は進んだが、それによって北芝は果たして住みやすい地域となったのか。1986 年に実施した実態調査は、「まちづくり」という新たな運動へと転換する大きなきっかけとなった。小学生・中学生を対象に調査した結果、学歴や自尊感情の低さが現れ、負の連鎖が連なっていたことが明らかになった。そこから、行政や同和対策への依存、支部への依存などとは違う、発想の大転換を迎えるようになった。とくに、閉じていた部落の人たちの心を開放させることによって、自尊感情を回復させることに注目した。そのツールとして、人と人がつながる「まちづくり」という新たな運動が取り入れられた。③「つぶやき拾い」に着目した地元運営による居場所（心を開放する装置）の確保。人と人をつなぐという空間の確保としてさまざまな取り組みが行われた。そのなかで、隣保館（ライトピア 21）やいこいの家は指定管理等を生かしたものであるが、公設民営ではなく、地元運営を重視してきた。こうした取り組みは、地域の人が自分から心を開放する「部落解放」が実現される基盤づくりとして行われてきた。

Step2：地域の文脈を思い出しながら、地域に出て歩く

丸岡氏の篤い思いを聞いてから、ライトピア 21 を出て地域内を歩き始めた。フィールドワーク事前学習（大阪）の第 1 回「地区を歩く」に登場する地域内のさまざまな場所を訪問した。まず、まちづくり事業によって整備された、コミュニティ道路を歩いて、「芝楽広場」に到着した。そこにある NPO 法人の事務所やコミュニティレストラン、コンテナショップ等を訪ねた。今

年リニューアルされたコンテナショップが昼食の場所となっていたため、ゆっくりと北芝のシェフの料理を味わいながら、昼には子どもの駄菓子屋、夜には大人たちの居酒屋になるという、地域運営だからできる柔軟な拠点の取り組みをイメージすることができた。

その後、子ども通貨の「まーぶ」の行事が開かれている場所に向かった。北芝に隣接したショッピングモールがあるところに、子どもたちのハローワークが開催されていた。子どもたちがハローワークを通して仕事を得て働く。働くことで「まーぶ」を稼ぐといった仕組みで、子どもたちの生き生きとした仕事の場をみることができた。

再び北芝地域に戻り、北芝の職員の説明を聞きながら、昔の家があった痕跡、市営住宅、いこいの家等、地域の歩みを実感できるさまざまな場所を訪問した。

Step3：現地の人々と話し合う（質疑応答や懇親会の場を借りて）

地域の文脈や実際の活動の場をみてから、ライトピアに戻り、質疑応答の時間に入った。

その後、今回の宿泊場所となった「南の家」（地域の民家を改修したコミュニティハウス）の広い居間で懇親会が開かれた。大きな鍋を囲んで、北芝の職員たちと食事をしつつ、自由に話し合う時間ができた。みんなが自由に語り合うこの場は、交流の意味だけでなく、北芝の職員が外部の人の目に映った北芝を通して、客観的に自分たちの活動を点検する場としての可能性をもっていた。フィールドワークをする側と職員の相互の自由な対話のなかで成り立つ自己発見的な場は、今回のフィールドワークに求められたもう一つの要素であった。

Step4：現場をみる多様な観点に接する

フィールドワークの２日目は、北芝地区のフィールドワークを深める時間となった。1 日目が丸岡氏のような地域のリーダーを中心とした北芝の話が多かったとすれば、2 日目はもっと幅広い視点から北芝をみるといったフィールドワークの深化段階として展開された。

一つは、北芝の若者を地区のリソースパーソンとして、彼らが考える部落差別や今の地域での活動等について話を聞かせてもらった。北芝の今を担っている 20～30 代の人々で（中島（市議員）氏、埋橋氏、上田氏、丸岡氏等）、北芝のなかで丁寧な人材育成が行われていることを感じることができた。

もう一つは、外部専門家の視点を取り入れたパネル討論である。外部者の立場で北芝にかかわっている寺川政司氏・日置真世氏、そして北芝の池谷啓介氏の 3 人が、北芝の取り組みについて討論を行った。この 3 人は、福祉開発マネジャーのモデルとなっている本履修プログラムの実務家教員である。寺川氏は、失敗してもいいチャレンジ型の居場所づくりが可能な組織風土をつくるマネジメントの重要性を示した。日置氏は、運動から始まったため、活動の展開に揺るぎがないという北芝の強みを示した。池谷氏は、NPO 法人をつくって中間支援を行ってきたが、そのなかで地域のエンジン（地縁型コミュニティ）と市民のエンジン（テーマ型コミュニティ）というダブルエンジンの相乗効果が重要と示した。こうした 3 人の討論から、福祉開発マネジャーに求められる視点や役割を垣間見ることができた。

Step5：自分の現場や問題意識に照らし合わせてみる

2 日目の午後の深化フィールドワークでは、履修生が各自の現場や問題意識に照らし合わせてみることが試みられた。そこで、履修生 3 名のプレゼンテーションが行われた。寺本氏は、市の職員がもっと地域とのつながりをつくり仕事のモチベーションをあげていくことによって、行政の縦割りを超えて地域開発のイメージをもって仕事できるような役所の風土づくりの展開について展望した。加藤氏は、自分のまちづくり活動を紹介しつつ、問題意識や入口が異なることから、みんなが考えるコミュニティは異なるが、同じことをやっていく人々の力を合わせることの重要性について展望した。名越氏は、フィールドワークから実態調査と仕事づくりに興味を持つようになり、今後、「地域で暮らすこと」「住民がつながること」等について地元での展開を展望した。

さらに、参加者みんな（履修生、北芝の職員、実務家教員等）がワークショップ方式でいくつかのテーブルをつくり、話し合いを行った。それぞれのテーブルでは、フィールドワークの内容を踏まえて、それぞれが自分の関心ごとや問題意識に引き寄せながら、自由に意見交換を行った。最後にそれぞれのテーブルでどのような話し合いが行われたかについて報告し、みんなで共有した。

二日間のフィールドワークを通して、フィールドワークの事前学習で学んだ多くのことが確認できた。部落差別をなくすという運動の文脈から、部落と部落以外のつながりをつくるということで、まちづくりがツールとして活用されてきたこと。その接着剤の役割が「暮らしづくりネットワーク北芝」という NPO に期待されてきたこと。さらに、「つぶやき拾い」のように、目の前の気づきが単なる気づきで終わらないように、それを共有し、それを素材に何らかのアクションをともにつくっていくということから福祉へと展開されてきたこと。そのようなことが可能な組織の基盤づくりに、福祉開発マネジャーの役割が大きかったこと。そこで、池谷氏の次の言葉に注目したい。「考えないといけない組織にする、考えざるを得ない環境をつくる」。組織のルーティン化、仕事のルーティン化をどのように克服するか、それを常に考えていくことが、福祉開発マネジャーに求められていると考えさせられたフィールドワークであった。